

ピアノ協奏曲を めぐる 3話

ピアノという楽器が時代ごとにドラマティックな変遷を辿ると同時に、ピアノ協奏曲の歴史も大変興味深いです。そんな中から3つお話を考えてみました。

1 「一人前」の証し

18世紀や19世紀は現代のシンガーソングライターのように、作曲家自身が演奏家も担って、自作自演を繰り返していた時代でした。モーツァルトが予約演奏会という自主公演をはじめとして自作のピアノ協奏曲を次々と発表していったように、一人前のピアニストにとって自分のピアノ協奏曲や協奏的な作品を演奏することは大変重要でした。19歳のショパンも《ラ・チ・ダレム変奏曲 op.2》でウィーンデビューを飾った後、《ピアノ協奏曲第2番 op.21》でプロの演奏家としてワルシャワでの正式な楽壇デビューを行っています。同時期に同じ年のシューマンもいくつものピアノ協奏曲の作曲に精を出していました。それらは未完に終わりましたが、手を故障する



ショパンのピアノ演奏 (絵画)

前に若きシューマンがピアニストとして「一人前」になるために熱心だったことが窺えます。

2 「室内楽の延長としての『ピアノ協奏曲』」

スペインの作曲家ホセ・パロミノの「Concerto ossia quinteto per cembalo o fortepiano (チェンバロまたはピアノのための協奏曲、または五重奏曲)」（1785年）は「協奏曲」ですが、ピアノ五重奏曲として書かれている作品で、18世紀において「ピアノ協奏曲」というものが室内楽的なものであったことを示す大きな例です。今日では古典派の協奏曲も大型のオーケストラと共に巨大なホールで頻繁に演奏されていますが、それは現代の楽器および

演奏会のあり方に適応したスタイルであった、作品の本来の姿とはかけ離れていることを忘れてはなりません。

フォルテピアノ奏者アルテュール・スホーデルヴルトが自ら結成したEnsemble Crisoforiとベートーヴェンのピアノ協奏曲全集をα（アルファ）からリリースしており、その録音では弦楽五重奏と管打楽器という編成で当時のピアノを用いて演奏しています。人数の少ないアンサンブルですが《皇帝》をはじめとした協奏曲のエネルギーとパッションに何と圧倒されることでしょうか。

弦楽器の人数が多かったとしても、19世紀の前半頃までトゥッティを除いたピアノ独奏部では弦楽はパートごとに1人ずつになることもあったという説もあります。ショパンやモーツァルトは協奏曲の「室内楽版」の楽譜も残していますが、特に19世紀後半以降にピアノの音量増幅に伴ってオーケストラの規模も拡大されるまで、協奏曲を室内楽の延長線上と捉えてもしくくりくるものがあります。

3 カデンツァは「演奏者自身」の見せ場

ロマン派以降のピアノ協奏曲においてカデンツァは作曲家が作品の一部として入念に書き上げているものがほとんどです。しかし古典派以前の協奏曲のカデンツァでは、演奏者の自作が演奏されることはウエ

ルカムで自由なものでした。作曲家が書き残してくれたものもありますが、それらは自作を書けない、あるいは即興的に弾けない人のためのものと言ってもいいぐらいです。ですから少なくとも古典派以前のカデンツァは演奏者が自作を弾くのが本来理想的かもしれません。

しかし偉大な作曲家たちが自ら書いたものはもちろん、ブラームスによるバッハの協奏曲のカデンツァ、フォーレやサン＝サーンスによるベートーヴェンの協奏曲のカデンツァのような、時代を超えた作曲家同士の面白いカップリングなど、カデンツァには自作だけでなく楽しい選択肢が沢山あります。自由性が高い作品において、ソリストがどんなカデンツァを演奏会に用意してくるか注目してみるのも面白いかもしれません。

文／川口成彦
(フォルテピアノ奏者・ピアニスト)

紀尾井レジデント・シリーズ II 川口成彦 (第2回)

協奏曲の宴～withブロードウッド (1800年頃)

[共演]
La Musica Collanaメンバー
丸山韶(ヴァイオリン)
廣海史帆(ヴァイオリン) 佐々木梨花(ヴィオラ)
島根朋史(チェロ) 諸岡典経(コントラバス)
[曲目]
ファリャ : ドビュッシーの墓のための讃歌(1920)
セイシャス : 協奏曲イ長調(18世紀前半)
シュナイダー : ニューオーリンズのモーツァルト
モーツァルト : ピアノ協奏曲第11番イ長調 K.413 ほか

7/7
金
19:00

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。